

讃岐手打ちうどん屋

作者：川崎ゆきお

概要：讃岐手打ちうどんと看板にあり、ただのうどん屋ではない。

讃岐手打ちうどん屋

恒一が会社の行き帰りに、いつも見ているうどん屋がある。讃岐手打ちうどんと看板にあり、ただのうどん屋ではない。

恒一はうどんは好きだが、駅前の立ち食い店ですませている。

うどんが食べたいではなく、うどんでも食べようか程度の好きさだ。そばよりもうどんのほうが好き程度だとも言える。

その讃岐うどん屋が気になるのは、いつ通っても客の姿がないからだ。

夕食時に通りがかっても客はいない。そんなことでやっていけるのかと、不審に思うようになった。

店ができてから二三年になる。住宅地のど真ん中だが、車や人の量は多い。スナックやケーキ屋等も並んでいる。但し駐車場はない。店の前に止められるほどの道幅はない。

その近所に大衆食堂があり、うどんも出していたが、かなり前に潰れている。

そして恒一は、なぜ讃岐手打ちうどん屋は潰れないのかと気になり、夕食時に入った。

ガラス戸を開けると、いらっしゃいと、野太い声が返ってきた。

大柄でいが栗頭の男だった。

「はい、お客様ご一名ご来店」と、厨房に声をかけ、お茶とおしぼりを白木のテーブルに置いた。

恒一はかけうどんを注文したかったが、言えるような雰囲気ではない。いが栗頭のテンションが高いのだ。

品書きを見ると、うどんすきや鍋焼きうどんなどの写真がプリントされている。

天麩羅うどんは千二百円。

「かけ...」

「かけ、何をかけましょ」

ダシをかけてくれとは言えない。

「ああ、ちょっと待って」

恒一は品書きをもう一度見た。

かけうどんはない。

「きつねうどん」

いが栗頭の眉が曇った。鼻の付け根に横皺が走っている。

「で、よろしんですか？」口元だけは笑顔を作ろうとしているのが分かる。

いが栗頭は伝票にチェックマークを入れている。そのまま動かない。次の品を待っているのだ。まだ、何かを期待しているのだ。

「以上で...」

そのひと言で完全に腰を砕かれたのか、細い声で厨房へ注文品を伝えた。

恒一はいが栗頭と目を合わせないように、讃岐手打ちきつねうどんを食べたが、味も何も分からない。

そして、なぜこの店が潰れないのかも分からない。